

委員長（山本香苗君） ただいまから総務委員会を開会いたします。

委員の異動について御報告いたします。

昨日までに、渡辺美知太郎君、藤末健三君及び石上俊雄君が委員を辞任され、その補欠として水野賢一君、浜野喜史君及び磯崎哲史君が選任されました。

委員長（山本香苗君） 政府参考人の出席要求に関する件についてお諮りいたします。

行政制度、公務員制度、地方行財政、選挙、消防、情報通信及び郵政事業等に関する調査のため、本日の委員会に、理事会協議のとおり、内閣官房内閣審議官由木彦君外二名を政府参考人として出席を求め、その説明を聴取することに御異議ございませんか。

「異議なし」と呼ぶ者あり

委員長（山本香苗君） 御異議ないと認め、さよう決定いたします。

委員長（山本香苗君） 参考人の出席要求に関する件についてお諮りいたします。

行政制度、公務員制度、地方行財政、選挙、消防、情報通信及び郵政事業等に関する調査のため、本日の委員会に、理事会協議のとおり、日本放送

協会会長舛井勝人君外八名を参考人として出席を求め、その説明を聴取することに御異議ございませんか。

「異議なし」と呼ぶ者あり

委員長（山本香苗君） 御異議ないと認め、さよう決定いたします。

委員長（山本香苗君） 行政制度、公務員制度、地方行財政、選挙、消防、情報通信及び郵政事業等に関する調査のうち、公共放送の在り方に関する件を議題とし、質疑を行います。

質疑のある方は順次御発言願います。

吉川沙織君 民主党の吉川沙織でございます。

先月、二月十九日のNHKの審議に引き続き、今日も質疑に立たせていただきます。

先日もしましたが、会長の就任会見の、これに端を発する一連の問題をスクランダル的に捉えて批判するつもりは毛頭ございません。いろんな問題が、どの立場に立とうとも、いろんな声が、大きな反響が視聴者・国民の皆様から届いているということは、否定、肯定のどちらがあるうとも、紛れもない事実です。ですから、日本の公共放送が今重大な局面にあるとの基本的認識の下で質問を行いたいと思います。

国会の議事録に後々まで虚偽の事実が残ることがないよう、真実をお答えいただきたいと思います

すが、会長と経営委員長のそれぞれの御所見を伺います。

参考人（浜田健一郎君） 誠実に答弁するつもりでございます。

参考人（舛井勝人君） 同じく誠実にお答え申し上げます。

吉川沙織君 今、お二方からそれぞれ誠実にお答えいただけたという、こういう確約をいただきました。

今、NHKの中に関して様々な報道がございます。もちろん新聞もあれば、雑誌や、それからスポーツ新聞の類いまで様々ございますが、私が捉えましたところ、NHKの中、モミイズムという嵐が吹き荒れているのではないかと思っています。実証性や客観性を軽んじ、自分が理解したいように世界を理解する態度、異なる意見を持つ他者の公共的対話を軽視し、独り善がりな決断を重視する姿勢を反知性主義と言ってしまう。モミイズムもこの一種ではないかと私は考えています。

さらに、理事全員には緊張感、緊張感を持って日付のない辞表を提出させ、国会で理事全員が辞表提出の事実を認めると、同二月二十五日、衆議院総務委員会において、「私がどう思うかについては、これはまた別問題でございまして」と、来る四月二十四日に任期が切れる四人の理事を含む理事全員に対して恫喝とも取れる答弁を行つた

ど、威圧を続けておられます。これはいわゆる恐怖政治と同じ手法ではないかと、こういうふうに捉えています。

その一方で、会長御自身の緊張感のない発言に取材現場や営業現場は混乱を来しています。会長自身がもたらした大混乱の責任については、会長から具体的に責任を考慮した発言はなく、様々な委員会で、責任を取るおつもりはありませんか、こういう問いが繰り返されたときには、NHK会長としての責任の重さをしつかり身に受けて引き続き会長としての重責を全うしていきたい、この答弁の繰り返しです。これまで国会でNHKの会長がこのような答弁を繰り返したことはないのではないのでしょうか。

戦後の公共放送を担ってきたNHKは、まさに大きな岐路に立たされていると私は思っています。戦前の日本、五〇年代の米国と同様に、このように言論、報道が抑圧されるときこそ人間は真価が問われると思います。三種類に分類しました。勇気を奮って真実に向き合う人、保身のために口を閉ざす人、嵐に身を任せ上におもねる人、それぞれ人間性が試されることになると思います。

会長と経営委員長、この見解に対する御感想で結構ですので、お願いします。

参考人（初井勝人君） 私は、一月二十五日に私見を述べまして、それ以来、公的の場所で私見

を述べることにについては一切、口封じといったまいりょうか、私自身慎んでおります。

現在の状況につきまして、私も、やはり一刻も早い事態の収拾に向けて一生懸命やっているつもりであります。私自身、通常業務にもはや全力で取り組むことで会長としての責務を果たし、公共放送の使命に基づいたより良い放送とサービスをお届けすることでNHKの信頼回復に努めたいと考えております。また、視聴者の皆様には何らかの形で説明をしたいというふうに、そういう機会を設けたいと考えております。

いずれにしましても、私自身、自分の考えを送るに、個人的な考えを放送に反映させるということとはするつもりは全くございません。

参考人（浜田健一郎君） 私は、経営委員会の役割は、執行部と適切な緊張感を保ちながら、車の両輪の関係でNHKの経営を進めていくことだというふうに思っております。そういう意味では、そういう基本的な立場に立つて、今回の事態についても真摯に対応して早急に解決し、NHKの前進を目指していきたいというふうに思います。

吉川沙織君 それぞれ答弁をいただきました。事態の収拾に向けてということに関しましては、また後ほど伺いをさせていただきます。

私は、日本の民主主義の発展に少しでも尽くすことができればと思い、私自身は普通のサラリー

マンの家庭でございましたが、政治を志して今この場に立たせていただいております。しかしながら、その現場では、民主主義において最も重要な自由権の一つと考えられる言論、報道の自由の最前線に立つべきNHKが混乱の渦に巻き込まれ、迷走状態にあることを目の当たりにして、ただただ啞然としております。

加えて、残念なのは、後で申し上げますが、国民からNHKに対して非常に多くの声が届いています。国会での議論は、もちろん今日もこうやってテーマを絞って議論がなされておりますが、それでも、こうやってテーマが絞られない限り、なかなか国会での議論も活発ではなく、放送事業に携わる関係者の声も思ったほどではないことです。既に言論報道関係者が萎縮しているとすれば、ゆゆしき事態だと思っています。

NHK混乱の原因をつくり、いまだに自分には全く非がないかのごとく会長職にいらっしゃる会長に対しては、まず、これまでの報酬を返上した上、責任を取っていただきたいと思います。それでも会長として頑張っていたのだあれば、今後、無報酬でその任に当たっていただきたいと考えますが、会長の御所見伺います。

参考人（初井勝人君） アドバイスありがとうございます。ただ、私としても、引き続きNHKの会長職を全うしていきたいというふうに思っ

おります。私としても、全身全霊を傾けて職責を全うする所存でございます。

吉川沙織君 二月二十一日の衆議院総務委員会において、公明党の榊屋委員から、「重ねて伺いますが、みずからの報酬を返上して責任をおとりになる、事態をおさめるまでそうした取り組みをする、こういう気持ちは個人のお気持ちの中であるのかないのか、重ねて伺います。」と問われたのに対し、「私としましては、本当にNHKのために全力を尽くしてまいりますので、ぜひその辺をよく見ていただければというふうに思っています。」と答弁されたのみで、個人の気持ちの中に事態が收拾されるまで報酬を返上する気持ちがあるのかないのか、これは、個人の気持ちの中にあるのかないかという榊屋委員の問いに対してお答えになっておられません、いかがでしょうか。

参考人（初井勝人君） まさしく、私答えましたように、今後、NHKの会長としまして、この重責を全うさせていただきたいというふうに思っております。

吉川沙織君 では、過去自主的に報酬を返納した会長がいらつしやるということは御存じですか。

参考人（初井勝人君） 存じ上げております。

吉川沙織君 私も気になって調べさせていただきました。

平成十六年度、一連の不祥事に関連して、当時

の海老沢会長が月額報酬の三〇％、六か月間自主的に返納されています。また、平成二十二年度、大相撲賭博問題をめぐり職員が不適切なメールを送っていた問題では、当時の福地会長が月額報酬の五〇％、一か月自主的に返納されておられます。

三月十二日の参議院予算委員会において丸川珠代委員の質問に対し、「視聴者の皆様にも、今後折を見まして私から何らかの形できちんとおわびをする機会を持ちたいと思っております。」「こう答弁されておりますが、その際に報酬返上についても何か触れてはいかがかと思いますが、いかがでしょうか。

参考人（初井勝人君） 何回も申しておりますが、私としては、やっぱり引き続きNHK会長の重みを十分そんたくし責任を全うしていきたいと思いますが、今の報酬返上につきましては、過去の事例は私も承知しておりますし、それぞれの経営者がそれぞれの判断でそういうことをなされたんだと思います。私自身は私自身の判断で決めたというふうに思っております。

吉川沙織君 過去に、今お二方の例を引きました。このお二方というのは、もちろん職員の不祥事に端を発するもので、御自身が何かを起こして報酬を返納されたわけではございません。ですから、御自身の発言に端を発しているような混乱を巻き起こし、国民の皆様から、否定と肯定、それぞ

れの意見はあるにしても、多くの意見が出されているということは事実です。ですから、過去に責任を感じて自主的に報酬を返上されている会長がいらつしやる以上、視聴者に会長自らの姿勢を示すためにも、報酬返上というこういう手段は分かりやすいそれと考えますが、経営委員長の御見解を伺います。

参考人（浜田健一郎君） 本件につきましては、御本人が判断されることだというふうに思いますので、コメントは差し控えていただきたいと思います。

吉川沙織君 この問題を繰り返しても先に進みませんので、次に行きます。

二月十九日、先月のこの総務委員会での審議の際、NHKに対する国民の信頼回復のために会長は責任を取られるべき、私以外の多くの委員も申し上げました。しかしながら、その後、会長が理事全員から辞表を取っていることなどが発覚したほか、御自身の発言についても、例えば三月三日の参議院予算委員会での質問に対し、就任会見での発言は記者に言われた、もちろんこれ三月六日の記者会見で、あなた方を責めるつもりはないと、こういうこともコメントされておられますが、自らの立場に対するいろんな発言を繰り返されており、NHKにおける混乱というものは収まる気配がないのではないかと思っています。

昨日の衆議院総務委員会でも指摘があったよう  
でございますが、改めて伺います。国民・視聴者  
から寄せられた意見の数、最新の数値を教えてください。

参考人（初井勝人君） 就任会見の一月二十五  
日から昨日の夕方までに寄せられた視聴者からの  
御意見はおよそ三万二千三百件でございます。内  
訳は、批判的な意見がおよそ二万八千件で六四％、  
肯定的な意見がおよそ六千件で一八％、それ以外  
のことは問合せということになっております。

ちよつと今数字間違えまして、二万八千と六千  
件でございます。あつ、二万八百。ごめんなさい。

吉川沙織君 実は一月二十五日の就任会見から  
いろいろ意見の数というのが問われています。私  
も気になって、どの程度の期間でどの程度増えて  
肯定と否定の割合がどの程度あるのか、議事録を  
追ってみました。この件に関して質問が出され始  
めているのは二月四日の衆議院の総務委員会から  
です。

二月四日衆議院の総務委員会では計一万二千三  
百件、批判が六〇％、肯定が三〇％。二月五日の  
参議院予算委員会での答弁では一万二千七百件、  
二月十三日の定例記者会見では一万六千件、二月  
十九日の参議院総務委員会においては一万七千九  
百件、三月六日の定例記者会見では二万九千七百  
件、そして昨日の答弁では三万一千九百件で、今

日は三万二千三百件。大体これ平均しますと三百  
件から四百件、一日平均で出ています。

と同時に、注視すべきところは、肯定は最初は  
確かに高つていました。三〇％ありましたが、

今お答えいただいた最新の数値では一八％まで下  
がっています。ですから、このNHKをめぐる混  
乱というものは、収束、収拾に向かつているので  
はなく、まだいまだに、収拾に向かうところか、  
その過程の途中であるということを捉えておりま  
すが、経営委員長の御所見を伺います。

参考人（浜田健一郎君） 今混乱を、最中かと、  
そういう御趣旨の質問ですよね。

このように多数の御意見を各方面から頂戴して  
おり、大変厳しい状況であるというふうに認識し  
ております。初井会長も、今後、視聴者・国民の  
皆様に対し何らかの形できちつと説明する機会を  
設けたい旨の発言もされており、執行部で事態収  
拾に向けた対策が行われるものと認識をしております。

経営委員会といたしましても、一刻も早い事態  
の収拾に向けて、自らの責任を自覚した上で、真  
摯な議論に基づく自律的な運営を引き続き行い、  
監視・監督機能を十分に果たしてまいる所存でこ  
ざいます。

吉川沙織君 後ほど申し上げますけれども、自  
主自律、NHKにおける自主自律の観点から、経

営委員会そして監査委員会がその機能と役割、自  
己に課された任務を発揮していただくこと、その  
機能を発揮していただくことを期待いたしております。

今ほど答弁いただきました。もう三万件を超え  
る、こつという声が届いているということは厳然た  
る事実です。これだけ大きな反響があると、営業  
の現場に対する影響は少なからず、もしかしたら  
少ないかもしれませんが、多いかもしれません。ど  
ちらかは分かりませんが、影響がないとは言  
えないと思います。

NHKの受信料徴収を担当する現場での動きと  
いうものはどうなっていますでしょうか、会長。

参考人（初井勝人君） 今おっしゃいましたそ  
の視聴者からの御意見というものは、当然数字で  
出ておりますから、それはそれで私としても非常  
に重大なことであるというふうに受け止めており  
ますし、また御意見もいろいろあるということも  
承知いたしておりますが、現場の地域スタッフ等  
からは、契約や収納の業務に支障が出ている、早  
急に事態の収拾を図ってほしいといった声などが  
寄せられております。これも私は承知しておりま  
す。私は、地域スタッフ等を通じて、視聴者から  
は、会見の場で個人的な見解を述べることはいか  
がなものか、発言の内容は問題であり納得できな  
い、受信料を支払う気がなくなるといった厳しい

声が多く寄せられていると聞いております。

私は、一件少し収まりましたらば、現場に行きまして営業と一緒にやるということも考えておりますし、それから、役職員一丸となっていることを、信頼を回復したいというふうに思っております。

吉川沙織君 事態が収まりましたならば営業の現場にお出かけいただく、これはもちろん大きなことだと思っています。

二月の十九日のこの委員会においても、営業の現場、営業の御出身であられますから、是非営業の現場に足をお運びいただければということをお願いしたけれども、事態が収拾しましたならばということ、これ、いつ頃と捉えておられるのでしょうか。

参考人（初井勝人君） 今、外に出ていくだけの時間を与えられておりませんので、国会にいろいろ呼ばれておりますので、それが減りましたらやります。

吉川沙織君 外に出ていく時間が与えられておりませんのでと今会長はおっしゃいました。これは、国会が、国民の代表である国会の場で、いろんな問題があつて国民・視聴者から様々な声が届いている、だからその真意を、もしかしたら会長もおっしゃりたいことたくさんあるかもしれない、ですからこつやつて今日も公共放送の在り方につ

いて議論しているわけなんです。会長、いかがですか。

参考人（初井勝人君） いろんな、本当に私は現場の意見というものをいろいろ重く受け止めておりまして、そういう意味で、私自ら営業、もちろん役員みんな一丸となつてこつこつことを進めていくということでございます。これについては私は必ず実行したいというふうに思っております。吉川沙織君 今、事態が収拾するのはいつ頃かという問いを立てさせていただきました。これ、いつ頃と思っておられるのでしょうか。再度伺います。

参考人（初井勝人君） まあ、私たちでできる限り速やかな収拾のために努力をしてまいりたいというふうに思っております。

吉川沙織君 速やかな収拾、もちろんできればいいと思います。ただ、先ほど最新の数値伺いました。国民・視聴者からの意見、私は、平成二十年三月二十八日のこの参議院総務委員会で訪問集金の在り方について当時の福地会長に質問をさせていただきまして。平成二十年の十月一日から訪問集金制度は廃止されています。訪問集金は私は余り廃止すべきではない、こつこつ立場に立つて質問をさせていただきまして。なぜならば、訪問集金であれば二か月に一度スタッフの方が足を運んでくる。そのときに、能動的ではない視聴者や

国民の皆さんからも、もし何か不祥事や問題があったときに直接的に声を伝える、この窓口が用意されている。でも、今は基本的に口座引き落としです。来月の中頃、それから終わりにはある程度受信料に対する影響も出てくると思いますが、そういうもつ既に営業現場からの悲痛な声が会長の耳にも届いているということです。

経営委員長、実際に一連の会長発言に端を発するこの問題において国民・視聴者からの声がこれだけ多く寄せられているということ、そして実際に営業の現場からも悲痛な声が上がっているということ、この現場で大きな支障が生じている事実に対する経営委員長の受け止めを伺います。

参考人（浜田健一郎君） 視聴者・国民の皆様から多数の御意見を各方面から頂戴しており、大変厳しい状況であるというふうに認識をしております。先日、経営委員会においても、営業現場の声を吸い上げていただくことを考えてほしいという意見も出されました。

経営委員会といたしましても、受信料の契約・収納状況が目標を達成できるよう注視をしてまいりたいというふうに思っております。

吉川沙織君 目標が達成できるよう注視をしてみたい、こつこつやりました。もし目標が達成できなかったら。一連の不祥事があつて、福地元会長、松本前会長の下で、受信料の値下げと

いう、こういう大きな壁も乗り越えながら、徴収は上向きでした。これがもし下がったならばどうなるんでしょうか。

参考人（浜田健一郎君） 仮定の話でございますのでお答えにくいんですけども、もしその際はきちつと分析をして対応を考えてまいろうかなというふうに思います。

吉川沙織君 前回の質問で、会長の一連の発言等によってNHKの業務に大きな悪影響が出ているのではないかと伺いました。国会においても、衆議院、参議院、総務委員会や予算委員会で会長等の言動が取り上げられ、質疑も行われています。

二月十九日以降で構いませんので、経営委員会がいつ開催されたか、経営委員長に伺います。

参考人（浜田健一郎君） 二月十九日以降に開催した経営委員会は、二月二十五日と三月十一日でございます。

吉川沙織君 このように、NHKが非常事態に置かれているからこそ、経営委員会におかれましては熱心で真摯な議論が行われたと思います。

例えば、二月二十五日の第千二百八回経営委員会には経営委員全員が出席されたのかどうか、伺います。

参考人（浜田健一郎君） 二月二十五日の委員会は百田委員が欠席をされております。

吉川沙織君 二月二十五日の第千二百八回経営委員会は一人欠席されたと今御答弁いただきました。その経営委員はイランを訪問されていたという話もございます。経営委員長は、この件事前に耳に入っていたんでしょうか。

参考人（浜田健一郎君） はい。届けをいただいております。

吉川沙織君 この経営委員のツイッターを見ますと、経営委員会が開催された日にはイランを訪問されていたようです。その上、イランのアバダン訪問の後の記者団に対する発言を、二月二十四日、イラン国営イラン・ラジオは次のように伝えております。

この訪問のメッセージは、イランと日本の両国がこれまで以上に様々な分野で協力を拡大することができるといふものだとなりました。中略をいたしまして、氏は続けて、広島と長崎の原爆投下に触れ、私はあるときアメリカのやったことを強く非難したが、彼らはこの私の言葉に不快感を示し、私を普通ではないと言ったが、私は普通ではないのはアメリカ人の方だと思つたと述べました。また、私は将来イラン訪問について執筆しようと思つていと述べました。こつ報じられています。

この経営委員が、普通ではないのはアメリカ人だと思つという発言をすれば、反米を国是とするイラン当局は大喜びするかもしれません。また、

NHK経営委員である氏の発言を米国や他の国々は注視しているでしょうし、世界を飛び回って本当に外交に活発に取り組まれておられる総理にも少なからず影響があるのではないかと思います。

NHKがこのような非常事態において、経営委員会開催日にイランを訪れ、なおかつ日本はもとよりNHKの業務にも影響しかねないような発言を行った委員に対して経営委員長はどのような対応を取られたのでしょうか。

参考人（浜田健一郎君） 経営委員は委員一人一人の自律的な判断で行動されるものと認識しております。今御指摘の委員も一定の節度を意識して発言をされているというふうに思いますが、様々な意見があることも承知をしており、昨日、御本人とも電話で確認をいたしました。近いうち御本人とお会いし、意見交換をしたいというふうに考えております。

吉川沙織君 二月十二日の経営委員会において、経営委員の言動についての経営委員会見解を出されています。この中で、「経営委員としての職務以外の場において、自らの思想信条に基づいて行動すること自体は妨げられるものではないと認識している。」。

もちろん、個人の思想信条に基づいての御発言でしょうから、そこは問うつもりはありません。ただ、海外に行ってハレーションを起こしかね

いような発言をするということは、恐らくイランのテヘラン辺りにもNHKは支局があるかもしれない、そして、海外諸国で何か取材をしようとしたときに現場に影響が及ぶという可能性も否定できません。

二月二十一日の衆議院総務委員会において経営委員長は、「私も、二月の十二日の経営委員会で、今後は服務準則を遵守し、一定の節度を持って行動するという申し合わせをしました。それ以降については、各委員が遵守すべく行動をとっていただいているというふうに思っております。」と答弁されていますが、今もそう思われているでしょうか。

参考人（浜田健一郎君） 昨日も電話で確認したときも、一定の節度を持って行動するということを確認しました。ただ、現在様々な意見が出されているのも事実でございます。そういう状況を踏まえて、今後、再来週になるかと思えますけれども、御本人と意見交換をしてみたいというふうに思っております。

吉川沙織君 私は、この国会の場での議論というのは非常に大事であると思っています。新聞や雑誌の記事ももちろんずっと残っていくでしょうが、国会のこの場での議論における質問者、そして答弁者の発言内容は重要であり、かつ将来もずっと参照されるべき重要な資料です。

先月の委員会で、衆議院通信委員会での池田NHK元会長の発言なども引用しながら質問をさせていただき、国会を軽視しないでくださいという旨のことを申し上げました。以下、この点を念頭に置いていただいて真実をお答えいただければと思います。

去る三月六日の「クローズアップ現代」でケネディ駐日大使のインタビューが放送されましたが、NHKにおいて実際に大使のインタビューという企画、取材が行われていたことは事実であることが確定できました。

この番組の中で国谷キャスターは次のような発言をされています。

アメリカの議員、在日アメリカ大使館、そしてアメリカ・メディアは相次いで日本政府関係者や安倍政権が国会の同意を得て任命したNHK経営委員、そしてNHK会長による歴史認識に関わる発言を批判し、日本のリーダーの歴史認識に懸念を強めています。そしてまた、日本とアメリカの関係は、安倍政権の一員、それにNHKの経営委員や会長の発言によって影響を受けていると言わざるを得ません。

このコメントされています。実際の放送部分だけでも二回言及されており、もしかしたらこれ以外にも言及があるのかもしれませんが、会長等の発言によりNHKの現場が混乱をして大変であると

の現場からのSOSであると私は受け取っています。

このことに対する会長の御感想をお伺いいたします。

参考人（初井勝人君） まず、「クローズアップ現代」についてですが、これはもう番組を御覧いただいたとおりでございます。

それから、現場の意見につきましては、先ほども申しましたが、やはり非常に真面目に、真摯に受け止めて、我々はそういう声に対応できるように努力をしていきたいというふうに思っております。

吉川沙織君 会長御自身の発言に端を発する様々な問題、そして、二月二十五日の衆議院総務委員会で、理事の方々の勇気をもって発言しましたけれども、理事全員から辞表を取り付けたという報道は、恐らくNHKニュースの中で放映をされてはいないはずです。そんな中で、国谷キャスターは放送部分だけで二回も、経営委員とNHK会長はと、この言及をされています。本当に勇気のある私は御発言だったのではないかと考えています。

私は、二月の七日には、NHKの担当者が米国大使館の関係者と面談した際に、会長等の発言を受けインタビューが一時的に困難になったとNHKの担当者が判断し、この面談結果が二月七日付

けと二月十日付けの文書にまとめられ、会長にも報告されているものと私は確認しています。

この件に関しまして、二月十九日の質疑の際、会長は、二月十三日の定例記者会見で、同日時点で知らなかったのかどうか、こういう問いを記者から二回問われ、最終的に、聞いていない、ないと思います、こういう答弁をされていたことから、同趣旨の質問をこの場においてさせていただきました。結果、会長は、「二月十三日時点では本場に知らなくて、その前は、そういう話は一切会長の耳にも入ってなかったということなんですな。」とお伺いしたのに対し、会長は、「そういうことでございます。」、こう答弁されています。これは、会長がNHK内部で何ら報告の事実もなかったという事実にも取れる答弁をしているようにしか捉えられません。

もしNHK側が面談をしてNHK側の受け止めとしてそう受け止めたのであれば、NHKほどの組織であればトップである会長の耳に入っているのが当然だと考えます。会長へは報告がなされ、二月十日には報告を受けたと理解しています。

重ねて会長に伺います。二月十三日より前に「クローズアップ現代」への取材に関する報告を受けておられたのではないですか。もし受けていたとするならば、二月十九日の私の質問に対する答弁は事実に反することにもつながりかねません

が、いかがでしょうか、会長。

参考人（舂井勝人君） 結果として、「クローズアップ現代」でケネディ大使とのインタビューがなされました。私はこれが全てだというふうに思います。中での文書の何月何日にどうしたということについては、これはいろいろあるかもしれませんが、私は、私の申したとおりでございます。いずれにしても、この問題につきましては、この前、先般ケネディ大使とのインタビューがなされたことだと思います。

国谷さんの御質問については、これは国谷さんが自分で考えて、質問されたことでございますので、私がコメントする立場にはございません。

吉川沙織君 今、報道されたのが結果だ、それが全てだという、こういう答弁でございました。

この件に関してはもう更に問うことはいたしません、私は、NHK内部での報告、連絡はなされていたと考えています。しかしながら、本件に関するやり取りについて、二月十九日のこの場でやり取りもそうでしたが、NHKは取材、制作に關することであり答えられないと言い、米国側は公式に見解を表明していないため、実際のところは判断できかねます。ただ、言えることは、真実を権力がゆがめるようなことがあつては断じてならないということです。第四の権力とも言える報道に携わるNHKが、公共放送として真実を報

道していかれることを強く期待いたします。

経営委員長及び監査委員に申し上げます。

ただいま指摘いたしましたインタビューに関する会長の発言、そして、これから指摘申し上げます理事全員の辞表を取りまとめた件も含め、一連の会長等の発言の問題がNHKの取材、営業の現場に大きな支障を招いていないかというこの点について、会長が尊重されるとされる放送法において、第四十四条第一項に監査委員会による調査の規定がある以上、これに基づいて早急に調査することをお願いいたします。そして、その調査結果に基づいて、会長が職務執行の任に堪えるのか、非行は認められないのか、是非判断をいただきたいと思ひます。

経営委員長、そして監査委員会におかれましては調査し、そしてその結果を当委員会へ報告いただけますか。お伺いいたします。

参考人（浜田健一郎君） 現在、会長の発言等について厳しい御意見が各方面から寄せられていることについては真摯に受け止めております。

経営委員長として、会長には二度にわたって注意を行い、また、三月十一日の経営委員会で申合せを行ひまして、経営委員会の総意として誠に遺憾であることを確認し、会長にもその旨を伝えております。

経営委員会としても、一刻も早い事態の収拾に



向けて、自らの責任を自覚した上で真摯な議論に基づき自律的な運営を引き続き行い、監視・監督機能を十分に果たしてまいりたいと思います。

放送法第四十四条第一項に基づく調査につきましては、監査委員会が判断することでございますが、経営委員会が自ら継続して真摯に取り組んでおり、監査委員会は、現在、一連の事態とともに経営委員による対応を注視しているところであると理解をしております。

参考人（上田良一君） お答えいたします。

監査委員会といたしましても、現在、会長の発言等について厳しい御意見が各方面から寄せられていることは真摯に受け止めております。

これまで、経営委員長が会長に、先ほども御説明がありました、二度にわたって注意を行い、また、三月十一日の経営委員会で申合せを行って、経営委員会の総意として誠に遺憾であることを確認し、会長にもその旨をお伝えしております。

また、経営委員会は、一刻も早い事態の收拾に向けて、自らの責任を自覚した上で真摯な議論に基づき自律的な運営を引き続き行い、監視・監督機能を十分果たしていくことを申し合わせております。

この問題につきましては、就任会見における会長発言の直後から経営委員会が自ら継続して真摯に取り組んでおります。監査委員会といたしまし

ても真摯に取り組んでまいる所存であり、引き続き、一連の事態と経営委員会による対応を注視してまいりたいというふうに思います。

吉川沙織君 今、経営委員長、そして監査委員からそれぞれ誠実な御答弁をいただきました。

ただ、二月十九日の参議院総務委員会におかれまして、三月六日の放送に係る件について、監査委員は、会長の一連の発言に端を発することにしましては会長以下の役員から報告は受けておられない、こういう答弁をなさいました。でも、一方、三月六日の件にしましては、「そのような報道があることはもちろん承知いたしておりますけれども、個別番組の制作過程に関するにつきましてはコメントを差し控えさせていただきたいというふうに思います。」と、こういう、経営委員長とはニュアンスが異なる答弁をなさっています。初井会長以上にアメリカでも御活躍をされた上田監査委員、米国では報道、言論の自由が大切に尊重されています。ですから、経営委員会、監査委員会、それぞれ自律的にその機能を発揮されることを期待しています。

今、経営委員長、そして監査委員から、それぞれ会長に対して二度にわたって注意を行った、この件に関して伺いたいと思います。

経営委員長は、一月二十八日及び二月二十五日、二度にわたり口頭注意を会長に対して行っておりま

れます。拝見したんですが、一回目と二回目の注意でどの程度注意の強さが変わったのが、私、判断できませんでした。一回目は、「公共放送のトップとしての立場を軽んじたものであると言わざるを得ません。改めて自分のおかれた立場を十分にご理解いただきたい。」二回目、「ご自身の置かれた立場に対する理解が不十分であると言わざるを得ません。」としており、大差がありません。むしろ二回目の方が注意の長さが短い上、一回目の方が強く注意なさっているようにも思えます。

そして、先ほど経営委員長からも御答弁ございましたが、三月十一日の経営委員会では会長に申入れをされています。二度にわたって注意したことについて、注意せざるを得なかったのは誠に遺憾と会長への申入れをされるとともに、経営委員会としては一刻も早い事態の收拾に向けて自らの責任を自覚するとし、NHKとしては、国民・視聴者への説明責任を果たし、NHK予算の今年度内の国会承認を実現すべきという認識を出席者全員で確認した、こう報道されています。

十一日の経営委員会では会長の辞任そして報酬返上についての議論はなかったのか、あったのかただで結構ですので、経営委員長に伺います。

参考人（浜田健一郎君） ありませんでした。

吉川沙織君 一月二十五日の会長の就任発言に

端を発して様々な混乱を来しているということはこれは紛れもない事実です。これに対しては、注意だけで、辞任や報酬返上など、日付のない辞表を提出していない会長本人の責任が全く問われないというのは何ででしょうか。

参考人（浜田健一郎君） 二度にわたって私も会長に対して注意を申し上げているわけで、それから、先ほど申し上げましたように、二度にわたって注意を上げたことは大変遺憾であるという意思表示もさせていただいております。

吉川沙織君 二度にわたった口頭注意、それから三月十一日の申入れ、様々な取組をされているということは私も十分承知しています。ただ、理事全員が辞表を取られているんです。取材、報道現場、全ての現場が会長の発言などで混乱の極みにあるのに、その原因も調査せず、一丸となりということ自体が、経営委員長の御見識自体問われることになるのではないのでしょうか。経営委員長あるいは監査委員の感想を伺います。

参考人（浜田健一郎君） 辞表の問題につきましては、会長は人事権は濫用するつもりがないと言っております。また、理事の任命、罷免に当たっては経営委員会の同意を得る必要がありますので、個別の人事が提案された段階で適切に判断してまいりたいというふうに考えております。

吉川沙織君 個別の人事が提案された段階で経

営委員会としては判断をされると、こういう答弁だったかと思えます。

もちろん、今後どのような動きがあるか、私は存じ上げません。ただ、これだけ大きな問題になって、視聴者からの意見も、最初は一万件だったのが、昨日から今日に關しても四百件増えています。こつやつて三万件を超す状態になって、事態は收拾に向かうどころか混乱の度合いを深めているのではないかと私は思っています。

NHK会長に対する経営委員全員のそれぞれこの問題に対する意思確認を行うべきではないかと思いますが、委員長、いかがでしょうか。

参考人（浜田健一郎君） 先日の経営委員会でもかなりの時間にわたって意見交換を行いました。その時点での集約、到達点が、先ほど申し上げましたように、遺憾の表明、それから予算、それから経営委員会としては今後とも自律的に経営委員会の機能を果たしていくと、その三点であったと思います。

今後とも、次回の経営委員会でも意見交換を行うって、経営委員会としての機能を果たしていきたいというふうに思っております。

吉川沙織君 放送法第五十五条第一項に基づく経営委員会による会長の罷免の決定については、任命は九名以上の賛成が必要と法律に明確に書かれています。ただ、会長の罷免、経営委員会で行

おうとするならば、過半数で議決できます。

経営委員長、会長は既に理事全員から日付のない辞表を取り付けています。もちろん、辞表は御本人がそこに日付を入れなければ無効ですから、辞表自体の効力はないかもしれませんが、しかし、それが駄目なら会長の権限で罷免ができるのではないですか。経営委員会が同意すればできるのではないのでしょうか。

そこで、経営委員長にお伺いしますが、会長が放送法第五十五条第二項により理事を罷免するためには、辞表を書かせる以外にどのような方法があるのでしょうか。

参考人（浜田健一郎君） お答えいたします。放送法第五十五条第二項では、「会長は、副会長若しくは理事が職務執行の任にたえないと認めるとき、又は副会長若しくは理事に職務上の義務違反その他副会長若しくは理事たるに適しない非行があると認めるときは、経営委員会の同意を得て、これを罷免することができる。」と規定されていることは承知しております。

放送法では、会長が理事を罷免する手続を定めた条文はこれ以外にはないというふうに思っております。

吉川沙織君 一昨日の参議院予算委員会でも、この第五十五条の二項、会長が日付のない辞表を取ったこと、これは理事全員の勇気をもって、辞

表を提出しました。二月二十五日の衆議院総務委員会でも明らかになったから分かったようなもの、もしこれがずっと真実が明らかにならないまま、第五十五条二項、非行は認められないけれども、辞表を取っていることをいいことに全員首にするということもあり得たのではないかと思っています。

私は、いずれにしても、NHKの来年度予算案が国会を通過した後、前の会長時代に選任された理事が再任されないということも含め、罷免あるいは解任されるのではないかとこのことを懸念しております。そのときは経営委員会はどのようなスタンスを取られるのか、経営委員長に伺います。

参考人（浜田健一郎君） 仮定の御質問でございますのでコメントできませんが、我々は経営委員会としての職務を果たしていくまででございます。

吉川沙織君 仮定の話には答えられないとおっしゃって答弁回避をし、実際にそのような結果になったときに、後ほど申し上げますが、二月中旬には会長から理事を総入れ替えすると聞いておられるはずですから、結果的にはその会長に手を貸して阻止しなかったことになるかもしれませんが、いかがでしょうか。

参考人（浜田健一郎君） 会長からそういう話は聞いておりません。

吉川沙織君 では伺いますが、第千二百七回経営委員会において全員出席の上しっかり議論して、「それでもなおかつ私は大変な失言をしたのでしようか。」とおっしゃる会長の出処進退こそ判断していただくのが経営委員長としての当然の任務であると考えますが、いかがですか。

参考人（浜田健一郎君） 経営委員会としては、初井会長以下執行部が一丸となって今後ともNHKが放送法で定められた公共放送の使命を果たすよう求めているところでございます。

経営委員会といたしましても、会長の業務執行を監督する役割を果たすことが責務だと考えており、これに真摯に取り組んでまいります。

吉川沙織君 またこの件に関しては後ほど委員長の見解をお伺いしたいと思います。

会長が理事全員の辞表を会長就任当日に提出させたことについて、これからいろいろ伺っていきたいと思います。

会長は、二月二十六日の衆議院予算委員会において、「こつこつということは一般社会ではよくあることだと私は理解しております。」「こつ答弁されていきますが、会長のおっしゃる一般社会とはどこの社会のことでしょうか。

参考人（初井勝人君） お答えいたします。ビジネスの世界のことを申し上げております。

吉川沙織君 日本商工会議所の三村会頭は、通

常の会社でそういうことが行われているということとは聞いたことがない、異常な状況とされ、経済同友会の長谷川代表幹事は、三村会頭の一般的でないとの発言は正しいのではないかと、経営を監視する取締役の発言の自由をあらかじめ制限することとは適切ではない。さらに、元経団連評議員会議長で東芝相談役、現在日本郵政社長の西室氏は、一般社会で常識的に行われているとは思っていない、こつこつとおっしゃっています。日本を代表する経済団体のトップや元幹部の皆さんがこつこつて会長の発言を否定されています。NHKと同業の民放ですが、フジテレビの亀山社長も、普通の会社であることだという方が奇異に感じた指摘されておられますし、JR東海の山田社長も、初めて耳にした事例と述べています。

会長御自身も、昨日の衆議院総務委員会でも、ユニシスの社長時代に辞表を取ったことない、そのようなことはないとされていますが、改めて伺います。会長がおっしゃる一般社会、どこの社会でしょうか。

参考人（初井勝人君） お答えいたします。言つまでもなく、私はビジネスの世界でしか今まで時を過ごしておりませんので、そのことを申し上げていることは先ほど申し上げたとおりでございます。

それから、私のコメントに対して高名な方々が

そういうコメントをされておりますけれども、それはその人たちの個々の物の考え方であり、その人たちの経験によるものだと思っております。例えば、多くの会社は百年以上の歴史があるわけですから、その中で経験したことがないからといって、それが有り得ないということでもない。

加えて申しますと、民間の会社というのは役員の任期は一年でございます。ですから、我々の二年とは違うわけでございます。

吉川沙織君 会長の任期、御自身……（発言する者あり）

委員長（山本香苗君） 御静粛に願います。

吉川沙織君 会長、御自身、今、任期二年とおっしゃいましたが、二年なんですか。

参考人（粕井勝人君） 会長、副会長は三年でございます。

吉川沙織君 会長は放送法第五十三条を御存じでしょうか。

参考人（粕井勝人君） 任期でございます。会長の任期、副会長の任期は三年でございます。

吉川沙織君 五十三条を御存じですかと伺ったんです。

参考人（粕井勝人君） 任期が五十三条だったことは覚えておりませんでしたが、五十三条にそのように書いております。

吉川沙織君 今会長は会長御自身と副会長の任

期だけについてしかお答えになりませんでした。放送法第五十三条は、「会長及び副会長の任期は三年、理事の任期は二年とする。」、こういうふう

に明記されております。昨日、三月十三日の衆議院総務委員会で、会長は、今もおっしゃいましたが、民間の取締役は確かに任期が一年です、これを念頭にかどうかは分かりませんが、いずれは一年に変えた方がいいと思う、こう答弁されております。

第五十三条には、会長と副会長は三年、理事の任期は二年、こう書かれています。放送法を改正しようと思えば、この国会、この総務委員会で議論をしなければいけません。放送法を改正したい、こういう御意向なんでしょうか。

参考人（粕井勝人君） 私は、任期は一年の方がいいと申し上げて、それを本当に実行する際にはやはり放送法を変えていただかなくてはいいないので、そのときにはそれなりの手続を取るということでございます。

吉川沙織君 会長は放送法のことをよくおっしゃいます。でも、放送法はこの立法院でしか変えることができません。立法院の権限を侵すんですか。

参考人（粕井勝人君） 私は、やはり民間と比較してのものを申し上げたわけで、ずっと私は放送法を遵守していくというわけでございますから、

放送法がある限りにおいては、今のままである限りはそれをきちっと遵守していくつもりでございます。

吉川沙織君 放送法を遵守される、こうおっしゃるならば、なぜ昨日理事の任期いずれ一年にしようと思つとおっしゃったんでしょうか。

参考人（粕井勝人君） それは、やはり人事の弾力性とかですね、そういうことを含めて私の意見を申したわけでございます。

吉川沙織君 もうこれ以上繰り返しても仕方ありませんので、この五十三条に触れる前に会長が答弁されたことについて少し伺つてみたいと思います。

会長、辞表が、提出はよくあることと答えられたことについて、三月六日の記者会見で、そういうことは聞いたことがないという話がされている、先ほども事例申し上げました、報道で聞くが、どういう意味合いで言ったのかという記者からの問いに対して、それはその人たちの経験に基づいて言っていると思うが、その方たちのことについてはコメントしないと答えておられます。その方たちのことを聞いているわけではありません。その方々と違つてから会長の御経験を聞いているんです。自分の言つたことを聞けと言つて辞表を取り、一般社会ではよくあることと言つておきながら、財界の重立った方々、先ほども高名な方々と会長御

自身おっしゃいましたが、財界の重立った方々が聞いたことがないとおっしゃっているのに、コメントされないというのは無責任ではないですか。その人たちの経験に基づいて言っていると思うと、御自身はこの方々と違う経験をされたようなことをおっしゃっていますが、例えば西室氏は会長と同じように民間の出身であり、その後、日本郵政や東京証券取引所など公的な職のトップをなさっており、このような人も、一般社会で常識的に行われているとは思っていないとコメントされています。

人の人事に関することを、それも普通一般には行わない異例なことをするには、普通以上の明確な理由があつてしかるべきではないかと思えます。それがコメントできないでは国会では通用しません。説明できないことをすること自体が独善的であると指摘せざるを得ません。

なぜ理事全員の辞表を日付なしで提出させたのですか、国民一般に分かるように御答弁いただければと思います。

参考人（粕井勝人君） 辞表を、日付のない辞表を就任初日に出してもらいました。それは、分かりやすいようにとおっしゃいましたので言いますと、やはり新しい会長が来たときにもう一度心機一転、緊張感を持ってやってもらいたいという気持ちでございます。お笑いになりましたけれど

も、私は真面目にそのように考えて出してもらいました。何回もいろんな場で申し上げておりますが、私は、がゆえに、じゃ全員首だなんて言ったこともないし、そういう気持ちもありません。それから、一つちょっと委員、お願いしたいんですが、もう少しゆっくりしゃべっていただけると、私もちよつともう少し分かりやすいんですが、います。

吉川沙織君 ゆっくりお話ししたいんですけれども、あれもこれも聞きたいことございますし、会長の答弁が不誠実な場合が多ございますので、どうしても、こちらも落ち着いて申し上げようと思つていてもそれがかなわないという事情も御推察いただければ有り難く思います。

先ほど、辞表を取ったこと、それから一般社会に関してビジネスのことだとおっしゃいました。これに関連して伺います。一昨日の参議院予算委員会での質問に対して、「これは緊張感を醸し出すためでございますけれども、同時に、私のマネジメントとしての、いわゆる、まあちよつと適当な日本語が生まれませんが、そのために私はそういう辞表を預かったわけでございますが、」と答弁されています。

企業経営に関して辞表を取ることはマネジメントの一つなのか、会長の御見解を伺います。

参考人（粕井勝人君） 私が申し上げたかった

のは、様々な民間企業や団体など、それぞれの組織におきましては、運営の在り方とか置かれた環境、企業風土によつて経営の方法がそれぞれ違うということ、それぞれ適切な方法があるのではないかと思つているということでございます。ただ、繰り返しになりますが、人事権を濫用することはございません。

吉川沙織君 辞表を取る、辞表を取るといふことは、罷免権をちらつかされて威圧されプレッシャーを受け、常に罷免されるかもしれない、こういう不安の中で、緊張状態の中で業務に集中しろ、こつと言われていたのと同じです。これが普通の一般社会の理解だと私は思っています。普通であれば、この業界、何も分からない大きな公的機関のトップに就くのだから、会長御自身が緊張感を持つて、任命権者である経営委員会の長である経営委員長に、何をやらすか分からないから日付を入れない辞表にサインをして事前に提出して決意のほどを示すというのが普通の一般社会でないかと思つています。

会長がやりたいようにされるために、人事権は濫用しない、これも何度もおっしゃっているのは私も理解しております。ただ、会長がやりたいようにするために辞表を取ったのではないか、これが私自身の受け止めです。

組織体、特に企業などは継続が前提だと思いま

す。会長の得意な英語で言うゴイングコンサーン、そういう意味だと思います。ただ、前の会長が選ぼうが、前の人事を否定しては、これは組織は継続しません。組織は前の人の仕事や積み残し案件に取り組みながら発展していくものです。前の人が決めた理事を否定するということは、私は組織の崩壊につながると考えます。

ところが、会長は、先ほどから申し上げておりますとおり、就任日の一月二十五日に臨時役員会で、あなた方は前の会長が選んだ、今後の人事は私のやり方でやると述べたとの報道がありますが、会長、これは事実でしょうか。

参考人（舂井勝人君） そういう事実はいません。私は役員に、これからの人事は自分がやるから言うことを聞けとか、そういうことは一切言っておりません。

吉川沙織君 本場に一切そのような趣旨のこと。もちろん、私はその役員会に出られませんので分かりません。理事の方々も存じ上げませんので分かりません。ただ、辞表を取った、日付のない辞表を提出させたという事実があります。それを取るに当たって、ではどのような理由でその辞表を集められたんですか。

参考人（舂井勝人君） ただ辞表を書いてくださいと、こつこつに申し上げました。そして、みんなで一緒にやろうと、こつこつに申し上げ

げたわけでございます。

吉川沙織君 今日は私は、参考人は二月十九日の総務委員会と同様、会長、経営委員長、監査委員にしかお越しいただいておりません。前回は辞表の提出の事実も国会でも議論になっておりませんでしたし、私ももちろん存じ上げませんでした。私は、今日、営業現場の影響、放送に対する影響、受信料に対する影響、新卒採用に与える影響、様々なことを御担当の理事に伺いたかった。でも、辞表を提出させられている以上、それを取った会長御自身、そしてそれを選んだ経営委員長、そしてそれを監査すべき監査委員の、前と同じ参考人をお願いをしました。

NHK予算が国会で審議されれば通過することになります。四月二十五日には、任期満了の理事を含め、全理事がまさか辞任させられるということはないかと思えます。会長は、昨年三月、バドミントン・アジア連盟会長を解任された、そのように理事全員が解任されるのではないかと考えが、これまでの発言や言動から推測せざるを得ません。もちろん、会長の後に就任なさった副会長や永田町各方面とやり取りされている理事の方は違つと思えますが、会長の御見解を伺います。

参考人（舂井勝人君） 人事のことをこの場で私があしますこつこつとすることは、これは控えさせていただきたいと思えます。

それから、今バドミントン・アジア連盟の話がありました。あれもちょっと説明させていただきたいと思えますが……

吉川沙織君 聞いていないです。

参考人（舂井勝人君） いや、聞いていないけれども、私としては、あれは違法な、違法なことをやっただけですよ。（発言する者あり）

委員長（山本香苗君） 会長、申し上げておきますが、質問者が質問したことに御答弁いただきたいと思えますので、よろしくお願いいたします。

吉川沙織君 経営委員長に伺います。

来月の経営委員会の開催予定を教えてください。

参考人（浜田健一郎君） 来月ですか。

四月は二回の開催を予定しており、一回目は四月八日、二回目は四月二十二日を予定しております。

吉川沙織君 理事四名の任期は四月二十五日で切れることになりました。その直前の経営委員会の開催予定は、今伺いましたところ、四月は、四月八日と四月二十二日であると伺いました。例えば、四月二十二日の経営委員会に理事総入れ替えの提案が会長からされた場合、その理事らはいわゆる緊張感が足りなかったということになるんでしょう。

NHKは以前から派閥抗争が頻繁で怪文書も多く飛び交っていたと言われています。怪文書とい

う陰湿な手段を用いてライバルの失脚を狙うのはNHKのお家芸だとさえ言われています。受信料予算の国会審議という国民の監視がある反面、体面を重視する余り、スキャンダルに弱つてしまっています。そのため、内容が真実であるうがうさであるうが、そういう文書をばらまかれた人物は追い落とされる可能性があると言われています。

しかし、海老沢元会長時代の不祥事が原因で民間から福地元会長、松本前会長を招き、そのような事態も鎮静化していました。ただ、会長の就任会見での発言に端を発しNHK内部が混乱し、会長の行動、発言の問題より、最近ではNHK内部の派閥抗争、怪文書などというものが取り沙汰されて、問題のすり替えが起きているようにも私は感じております。

会長の引き起こした現在のNHKの混乱はどなたに責任があるのでしょうか。NHKという大きな組織に問題があるのか、経営委員長の御見識を伺います。

参考人（浜田健一郎君） 現在の混乱は会長の御発言に端を発していると思いますが、NHKもろもろの要因の中で現在の混乱がまだ收拾できないというふうに思っております。

吉川沙織君 今明確な御答弁はいただけませんでしたが、

ただ、この辞表の件に関して私もいろいろ調べ

ていましたら、どうもおかしいと思いました。福地元会長が、今から二年前の平成二十四年三月二十一日付けの産経新聞に、会長時代の辞表取りまとめについて書いておられます。

私がNHK会長に就任したとき、NHKはコンプライアンス問題で揺れており、まさに最大の危機を迎えていた。一刻の猶予もなく、変わらなければいけない状況だった。そこで私は、まずはガバナンスから変わっていかねければと考え、当時のNHK理事全員に日付のない辞表を書いてもらった。トップとして、変わらなければ後がないという意志を明示したわけだとあります。

これをもって会長は一般社会ではよくあることとおっしゃったのではないかと推測しましたが、会長、いかがでしょうか。

参考人（初井勝人君） 繰り返になりますが、私は、福地元会長のそういうことはあったのかもしれませんが、私も、私は理事にやはり緊張感を持ってやってもらいたい、NHKもいろいろありますから、そういうことの緊張感を持ってもらいたいということでございます。

吉川沙織君 会長は、以前の辞表取りまとめの事例について、三月三日の参議院予算委員会で問われたのに対し、次のように答えています。「要するに、理事全員に辞表を出させるといって、そういうふうなことでいうのはあったんでしょ

うか。」との問いに対して、「確認しておりません。」と答弁されていますが、その後、確認はされたんでしょうか。

参考人（初井勝人君） しておりません。

吉川沙織君 前回の福地元会長ときは、橋本元会長時代最後でしたけれども、NHK本体職員インサイダー取引によって、理事が、コンプライアンス担当、報道担当理事はすぐに辞表を提出してお辞めになりました。そして、その混乱の中に外部から就任されたのが福地元会長であり、本当に混乱の中で就任をされ、それでも職員の支持を得、現場を歩き、そしてNHKの再生に御尽力なさいました。

今、我々はNHKに対する様々な課題はもちろんあると思っています。いろんな問題があるというのも分かっています。ただ、福地元会長が辞表を取ったときと比べて今は平穏な、そういう状況にあると思っています。ですから、会長御自身の発言や辞表を取ったというこの事実からこのような混乱が起きている、この事実について、会長御自身、前の事例含めて確認していただければと思いますが、いかがでしょうか。

参考人（初井勝人君） 前も言ったかもしれませんが、この辞表問題でNHKの理事が萎縮しているとは思っておりません。

吉川沙織君 理事の方々にはそういうお話、辞

表を取った後、辞表の件についてお話をされたり、辞表はいただいたけれども、預かったけれども、これは破棄するよと、こういうような会話はされたことございますか。

参考人（初井勝人君） 会話はありますが、破棄するとは申しておりません。

吉川沙織君 今も、では、お持ちということですね。

参考人（初井勝人君） 金庫にしまっておりません。

吉川沙織君 この問題について問うたとしても一般社会についてはなかなか御答弁がいただけず、そして理事は萎縮してないと、こういう思いを会長御自身は持つておられるという、こういうことが分かりました。

ちなみに、会長に伺います。

会長御自身は、一月二十五日で就任会見でいろんな御発言をなさいました。それに端を発して様々な問題が起こっています。これは、先ほどから何度も申し上げておりますとおり、厳然たる事実でございます。これに関して、一月二十五日の就任日ではニュースでNHKで取り上げられたようですが、辞表の取付け、理事全員からの取付けや、そういったことに関してNHKのニュースでは扱われたことございますでしょうか。

参考人（初井勝人君） 御承知のとおり、予算

委員会はずっと放映されておりますので、その中で視聴者の皆さんは現実にごういうやり取りが行われているかということをお承知だと認識いたしております。ただ、ニュースではやっていないというふうに僕は聞いております。

吉川沙織君 最近、昨日も広報局のクレジットで、最近発覚をしました平成二十二年度、そしてその前の技研の不祥事に関して第三者委員会を立ち上げられる、それに関して会長がリーダーシップを取って進めていかれる、こういう報道発表に私は触れました。それはそれでとても大事なことだと思っています。ですから、それは進めていただければと思うんですけれども、そのニュースは私、ちょうど先ほど指摘しました「クロースアップ現代」、しっかり見ようと思ってテレビの前に座っておりますところ、その前のニュースでこのコンプライアンス、恐れ多くも会長、副会長、コンプライアンス担当の理事でリーダーシップを取って原因追及やっていくという、こういう報道に触れました。

もちろん不祥事はいけませんし、この問題も追及していかなければなりません。ただ、一方で、その問題は大々的に会長の顔写真入りで報道されていまして、かなりの受け止めを持って私も拝見しました。一方で、会長御自身の発言や理事全員から辞表を取り付けた問題については、もちろん

ん予算委員会の国会中継の中でのやり取りは国民・視聴者の方々も御覧になっていると思います。が、ニュースでは報道されていないということでした。

そこで、伺います。

NHKにおける役員の職務分掌については、放送法第二十九条第一項第一号八の四、「会長、副会長及び理事の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制」に基づき、経営委員会が定めた内部統制議決というものがあります。この内部統制議決を受けて会長が定めた会長、副会長及び理事の職務分掌規程において、会長は副会長及び理事が責任を持って担当する領域を明確に定め、業務執行の決定権限を副会長及び理事に割り当てる旨、第二条において定められています。

この職務権限の行使については、権限行使の原則において二で、各職位にある者は組織を尊重し、互いに他の権限を侵してはならないとの権限不可侵の原則を定めています。

会長御自身の発言のニュースはなされていない。一方で、不祥事はもちろんいけませんから是非やっていただいたいと思うんです。ただ、このニュースについてそのような権限不可侵の原則を破るようなことがなかったかどうか、会長は御存じないでしょうか。

参考人（初井勝人君） そういうニュースの取



扱い等につきましては、現場で分掌に従いましてその責任においてやっております。少なくとも、私がそれを、分掌を破って、例えば私の話を報道するなどが、そんなことは全くありません。

吉川沙織君 もちろん、会長御自身はそういうことはないと思っています。例えば、権限を越えて別の担当理事が知らないうちにそういうことがなされたということは、この職務分掌の規定がある以上そういうことはないとは私は信じていますが、ないということでもいいですね。

参考人（初井勝人君） 結構でございます。

吉川沙織君 権限の侵害についてはないということでも明確に御答弁をいただきました。

辞表の件に少し戻ります。

先ほど、破棄はされていない、そして金庫にしまわれているということをお伺いいたしました。私自身の受け止めですが、辞表提出により会長は理事の生殺与奪の権を握っている、これは辞表を出していただいている以上、やっぱりそういう側面があるということは否定できないと思います。

会長は、国が右と言ったらNHKが左と言うことはできないという個人的見解を持っておられるようですが、会長が右と言ったら理事は左と言うことはできないということになります。万が一に左と言ったら首を飛ばすということではないかと私は思います。これは言い方の問題ではありません

ん。右と左を赤と白に言い換えたとしても同じことです。

放送法は、放送は健全な民主主義の発達に資することを定めています。民主主義の発達には自由な議論ができる環境が必要です。会長はNHK内部の民主主義を葬り去ろうとしているとしたら私は思えません。結果として、理事の勇気と自覚によってそれは実現しませんでした。しかし、会長は理事の生殺与奪の権を握っているのいいことに、衆議院総務委員会での答弁に先立ち、各理事に辞表提出の事実について、こんな答える必要はない、ノーコメントでというような趣旨のことを、つまり答弁を控えるようにと求めるようなことをおっしゃったことはございませんか。

参考人（初井勝人君） ございません。何かそういうふうに伝わっているようでございますけれども、そういう事実はございません。

吉川沙織君 伝わっているということは断じてございません、それは明確に申し上げます。ただ私は、四囲の状況から考えて、こういうことがあったのではないか、そういうふうに捉えてお伺いをしています。

なぜならば、一月二十五日の役員会で辞表を取り、あのような個人的な見解、取り消す取り消さないの議論がありました。でも、私はこの場ではそれは一回も問っておりません。でも、理事の辞

表の取付けがあつて、視聴者からの意見の件数は日に日に増え、そして混乱の極みにあります。その混乱を抑えようとするならば、私がもし会長の立場だったならば、辞表を取り付けていたとするならば、するならば、そういう問いが国会の場で立てられたとき、やっぱり答弁してほしくないというのが心情ではないでしょうか。だから今の問いを立てたわけであります。ですから、断じてそういうことが聞こえてきているということはございません。

ただ、今会長からは明確に、そういうことはありません、こういう御答弁を明確にこの国会の場でいただきましたので信じたいと思います。

経営委員長及び監査委員に再度伺います。

これまで指摘申し上げたインタビューの件、そして理事全員の辞表を取りまとめた件等から考えても、経営委員長の口頭の注意、二回繰り返し返され三月十一日も申入れをされた、こういうふうな答弁、今日もございましたが、理事全員なのか一部理事を除くのか分かりませんが、解任に向けて動くような状況にあると考えても不思議ではありません。

放送法第四十四条第一項、監査委員会による調査の規定がある以上、これに基づいて会長及び一部経営委員について早急に調査し、その調査の結果を公表するとともに、非行は認められないのか、

職務の執行の任に堪えるのか、経営委員長、監査委員、約束していただけますか。

参考人（浜田健一郎君） 先ほども申し上げましたけれども、会長は人事権を濫用するつもりはないというふうにも言っております。また、理事の任命、罷免に当たっては経営委員会の同意を得る必要があります。個別の人事が提案された段階で適切に判断してまいりたいと思っております。

いずれにしても、経営委員会は随時経営委員間同士で意見交換を行い、適切な判断ができるように努力をしまいるつもりでございます。

参考人（上田良一君） 監査委員会といたしましては、監査委員会が具体的な事案に即して調査の必要性を判断し、今委員が御指摘になりました放送法第四十四条に定められた方法によって調査を過去にも実施してまいりました。

今回の一連の問題につきましては、会長就任会見における会長発言の直後から経営委員会が自ら継続的に真摯に取り組んでいることを踏まえ、引き続き一連の事態、経営委員会による対応を監査委員会としては注視して役割を果たしてまいりたいと考えております。

吉川沙織君 本来であれば、この調査がなくなり、その調査の結果の公表なくして、来年度予算案の審議ができるわけはありません。会長が全ての理事から日付のない辞表を集めたことは、NH

K内部の民主主義を葬り、理事会を無意味化すると考えます。経営委員会は、NHKの自主自律、自浄能力を発揮し、その責務を果たされるということを私は強く求めます。

最後に、先月のこの委員会でも申し上げました、平成十八年六月、デジタル時代のNHK懇談会報告書について、会長は二月二十一日の衆議院総務委員会での感想を求められ、「私は、公共放送の役割は、視聴者・国民からの信頼があつてこそ果たせるものと認識いたしております。」と会長御自身の言葉で答弁されていきます。ただ、反響の件数にも表れているが、国民・視聴者の多くが今不信を抱いています。能動的な視聴者です。わざわざ意見を言う、そうでない視聴者の方も数多くいらつしやると思います。

経営委員会、監査委員会が自主自律の観点からその任務を果たされることを強く願うとともに、会長が責任を取られるということ、これがNHKの信頼回復につながるということを申し上げて、私の質問を終わります。

ありがとうございます。